数量8.8%減　代金3.4%減

2019年度第3四半期累計 紙巻たばこ販売実績

「メビウス・プレミアムメンソール・オプション・パープル・5」前年実績を上回り13位に浮上

一般社団法人日本たばこ協会（TIOJ）が1月29日に発表した2019年度第3四半期累計（4月～12月）紙巻たばこ販売実績によると、数量は919億本（前年同期比90億本、8.8%減）、販売代金では2兆1771億円（同759億円、3.4%減）と、数量の落ち込み幅が大きかった。2018年10月のたばこ税増税に続く2019年10月の消費税増税（値上げ）などによる需要減少傾向、そして加熱式たばこの市場拡大が影を落としているようだ。

また、JT公表値による国産たばこの第3四半期累計（4～9月）販売実績（リトルシガーを含む）は、本紙推計576億本（同49億本、7.8%減）で、国内マーケットシェアは62・7%。輸入たばこは343億本（41億本、10・7%減）で、シェアは37・3%である。

一方、売行き上位20銘柄は新規の「キャメル・メンソール・ライト・ボック」を除く19銘柄が同じ顔ぶれだが、その合計数量は3227億3200万本（同45億1900万本、12・1%減）となった。

銘柄別の主な動きでは2019年9月末日で廃止となった低価格品の「わかば」、「エコー」のうち、8位だった「わかば」は17位に急落し、その数量は40・7%減の10億9500万本だが、2019年度第2四半期累計実績より500万本の微増である。11位だった「エコー」は圏外に去ったが、代わって「キャメル・メンソール・ライト・ボックス」（20本入り400円）が10億本台に乗り19位にランクインした。同銘柄は2018年6月の新発売以来、急上昇して2019年第1四半期累計実績で20位にランクされるなど、その後も低価格帯市場をリードしている。

また、19銘柄のうち唯一前年度実績を上回ったのは「メビウス・プレミアムメンソール・オプション・パープル・5」で、28億本、2.2%増となり、17位から13位にランクアップした。

他の18銘柄は、すべて前年実績を下回ったが、減少幅の少なかったのは「セブンスター・ボックス」（4.8%減）、「メビウス・エクストラライト・100's・ボックス」（6.3%減）、「ウィンストン・キャスター・ホワイト・ワン・100's・ボックス」（7.3%減）、「セブンスター」（8.6%減）の順である。

紙巻たばこの第3四半期累計（4月～12月）上位20銘柄販売実績

（単位：百万本・シェア%）

2019年度第3四半期実績				2018年度第3四半期	
順位	銘柄	数量	シェア	順位	シェア
1	セブンスター	3,828	4.2	1	4.2
2	メビウス・ワン・100's・ボックス	2,832	3.1	2	3.1
3	メビウス・スーパーライト	2,332	2.5	3	2.7
4	セブンスター・ボックス	2,164	2.4	4	2.3
5	メビウス・エクストラライト	1,874	2.0	5	2.1
6	メビウス・ライト	1,806	2.0	6	2.1
7	メビウス	1,756	1.9	7	2.0
⑧	メビウス・エクストラライト・100's・ボックス	1,548	1.7	10	1.6
9	メビウス・スーパーライト・100's・ボックス	1,502	1.6	9	1.7
⑩	ウィンストン・キャスター・ホワイト・ワン・100's・ボックス	1,390	1.5	13	1.5
⑪	ケント・1・100・ボックス	1,376	1.5	12	1.5
⑫	マールボロ・KSボックス	1,318	1.4	14	1.4
⑬	メビウス・プレミアムメンソール・オプション・パープル・5	1,315	1.4	17	1.3
⑭	メビウス・エクストラライト・ボックス	1,211	1.3	16	1.3
15	マールボロ・メンソール・8・ボックス	1,182	1.3	15	1.4
⑯	メビウス・ワン	1,131	1.2	19	1.2
17	わかば	1,095	1.2	8	1.8
18	ウィンストン・キャスター・ホワイト・5	1,092	1.2	18	1.2
⑲	キャメル・メンソール・ライト・ボックス	1,010	1.1	–	–
20	メビウス・ワン・ボックス	970	1.1	20	1.1

※シェアは紙巻たばこ総販売数量に占める割合
○印の数字はランクアップ、□印の数字はランクダウン銘柄

タバコ屋さんの思い出の写真

2008年の「たばこ税増税反対総決起大会」

たばこ税増税断固反対――

2008（平成20）年10月29日、東京・千代田区の日比谷公園で開催された「たばこ税増税反対総決起大会」（全協・全国たばこ耕作組合中央会：共催）の写真である。大会には、たばこ販売組合900人、たばこ耕作組合800人、JT・愛煙家有志300人が一堂に会し、来賓の自民党衆参国会議員165人（代理含む）を迎えて、たばこ税増税断固反対を決議、その後、参加者約2千人がJR新橋駅を一巡するデモ行進を行った。大会スローガンは「たばこ販売店と葉たばこ農家の生活を守ろう」、「たばこ税増税は、たばこ離れに拍車をかけ、税収は増えない」、「消費削減目的の懲罰的増税は絶対に認められない」など、6項目を掲げた。

この意気込みが功を奏して2009（平成21）年度は見送りとなったが、自民党から民主党に政権が交代した後の政府税調による2010（平成22）度税制改正大綱において、1本当たり3.5円の過去に例を見ない大増税が決定した。これにより、2010年10月より「セブンスター」は300円から440円、「マイルドセブン」（現メビウス）が300円から410円となった。この大幅増税は市場を直撃し、需要が一気に冷え込む結果となった。当時のことを思い返すと、万感の思いがこみ上げてくる。

【東京都・匿名希望】

330円のキャメル・シガー2銘柄 3月6日より全国で新発売 JT

「キャメル・シガー・メンソール・スリム」と「キャメル・シガー・メンソール・ライト・スリム」

JTは、歴史あるキャメルブランドから、スーパースリムサイズのリトルシガーとして、「キャメル・シガー・メンソール・スリム」と「キャメル・シガー・メンソール・ライト・スリム」を、3月6日より全国で新発売する。価格は、買い求めやすい330円。商品概要などは次のとおり。

キャメル・シガー・メンソール・スリム＝スーパースリムサイズ（FK）／プレーンフィルター／20本入り・ハーフラウンドボックス／定価330円

キャメル・シガー・メンソール・ライト・スリム＝スーパースリムサイズ（FK）／プレーンフィルター／20本入り・ハーフラウンドボックス／定価330円

（注）リトルシガーは、「葉巻たばこ」に分類され、葉巻たばこについては、タール・ニコチン値の確立された測定方法が存在しないことから、タール・ニコチン値は記載されていない。なお、法令上（財務省令）も、紙巻たばこと異なり、「葉巻たばこ」にタール・ニコチン値の表示は義務付けられていない。

キャメル・シガー・メンソール・スリム

キャメル・シガー・メンソール・ライト・スリム

「百害あって一利なし」言説の背景⑥ 武田良夫

Q 前号で「疫学では因果関係は分からない」ということでしたが、疫学者は「人間を対象に、原因と結果の法則を数量化する疫学のみが因果律を明らかにできる科学的手法で、原因と結果を求める物理学や化学と同じ営為〔いとなみ（引用者注）〕である…人間における喫煙と肺がんや肺気腫の因果関係の証明は、今から半世紀前、1964年のアメリカ政府からの『喫煙と健康』という報告書までに済んでいる」（岡山大学教授津田敏秀「医学と仮説」／2011年／岩波書店…傍点、引用者）と書いていますね。

A 疫学者はそう考えるようですが※、文科省の統計数理研究所長や日本統計学会会長を務めた統計学の泰斗、林知己夫氏（統計界への貢献によって紫綬褒章、勲二等瑞宝章を受章）は「忘れてはならないのは、調査あるいは統計では因果律はわからないということである」と述べています（林知己夫「調査の科学」／2011年／ちくま学芸文庫）。

※2005年1月、「日本疫学会」は、「タバコのない社会が実現すれば、男性の肺がん死亡者を現在より40～70%、全がんを30%減らすことができると推計されます」と、疫学調査による因果律を前提にした「タバコ対策宣言」を発表しています。

Q 前号で、藤原正彦・お茶の水女子大学名誉教授の「マスコミや学者を含め、世界の大半の人たちは相関関係と因果関係を混同している」という言を紹介しましたが、この問題はどう考えたらよいのでしょうか。

A 脳科学の池谷裕二・東大大学院教授が高校生を対象に行った講義で、この問題をわかり易く解説しているので引用させてもらいましょう。

「実験科学が証明できることは相関関係だけ」

「因果関係、つまり原因と結果の関係にあるということと、見かけ上、相関がある（二つの変数が連動する）ということとは似ているようで、実は全く違います。私が特に強調したいことは、サイエンス、特に実験科学が証明できることは相関関係だけということです。因果関係は絶対証明できません。『いやいや、私は因果も証明できるぞ』という立場の人、ていますか？もし居たら、徹底的に私と議論しましょう。プロの立場から言わせていただくと、脳は相関が強い時に勝手に〝因果関係がある〟と解釈してしまうものなんですね。例えば『解熱剤を呑んだら熱が下がった』としても、科学的には『解熱剤を呑んだから熱が下がった』ということを厳密には証明できません。なぜならば、解熱剤を飲まなくても熱は下がったかもしれないからです。そこで科学者たちはどうするかというと、解熱剤を呑まなかったときの治癒率と呑んだときの治癒率を比較し、両者の治癒率に『統計的に有意な差』があるかどうかを検定するわけです。言うまでもなく、統計学は『相関の強さ』を扱う学問であって因果関係を証明するツールではありません。だから、統計によって見い出された〈差〉は『そういう傾向がある』という以上の意味を持ちません。では、科学的に因果関係を導き出せないとすると、この世のどこに因果関係は存在するのでしょうか。答えは『私たちの心の中に』ということになります。つまり、脳がそう解釈しているだけ。〈因果〉とは〝脳の錯覚〟なわけです」（池谷裕二『単純な脳、複雑な〈私〉』／2013年／講談社ブルーバックス）。

〈因果仮説〉は脳の錯覚!? 1

Q 疫学者は、がんの死亡率などを喫煙者と非喫煙者で比較して「統計的に有意な差」が見られると、「たばこを止めればこれだけがんの死亡率が下がる」と、あたかも〈因果律〉のように説明しますが、脳が自説に都合良く解釈しているということですね。

A そういうことになります。

ところで、昨年、国立がん研究センターの部長が「本当のたばこの話をしよう」という本を出しましたが、疫学者は何を以て〝本当の話〟というのでしょうか、〝脳の錯覚〟でなければ幸いですが…（笑）。

（続、次号）